キャラクター名
RN-1517

プレイヤー名

シンドローム	エグザイル ウロボロス	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	FHチルドレン
オプショナル		年齢	17	性別	男
覚醒	生誕	衝動	吸血	初期侵食率	41 %
出自	天涯孤独	経験	脱走	邂逅	欲望：居場所

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	1	0			4
感覚	2	0	0			2
精神	2	0	0			2
社会	1	0	0			1

HP	130
行動値	6
(非装備時)	6
戦闘移動	11
全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	2		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志	2		調達		
運転：			芸術： 歌唱	1		知識：			情報： FH	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
エンブレム：濃縮体	
思い出の一品	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
屍人	P	N		
友達	P 友情	N 悔悟		
FH	P 執着	N 恐怖		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
異形の刻印	10	基+3	常時	至近	自身	自動	-	
効果： 最大HP+［Lv*5］ｴﾝﾌﾞﾚﾑ適用								
崩れずの群れ	1	2	ｵｰﾄ	至近	単体	自動	-	
効果： カバーリング 1ﾒｲﾝﾌﾟﾛｾｽ1回								
紫:ミスディレクション	1	6	ｵｰﾄ	視界	単体	自動	-	
効果： 対象：範囲を単体に変更させる								
レネゲイドイーター	3	4	ｵｰﾄ	至近	自身	自動	-	
効果： ガード値+［Lv+1］D								
アクレピオスの杖	1	2	ﾒｼﾞｬｰ	至近	単体	自動	-	
効果： ［□Lv□D+浸食率/10］点HP回復								
異形の痕	★							
効果：								
ｲｰｼﾞｰﾌｪｲｶｰ：空の楽器	★							
効果： 友達が持ってたｲｰｼﾞｰｴﾌｪｸﾄ								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

◆生い立ち
誕生時点で既にオーヴァードとして覚醒していた。だが、母親は一般人であったため高濃度のレネゲイドに耐え切れず死去。
父親はそんな彼を気味悪がり、赤ん坊であった彼を孤児院の前に捨て置いた。
孤児院で数年過ごすが、皆彼の異様な力や身体に刻まれた傷痕を気にして近寄らない。友達は一人もおらず、周りから孤立する日々を送っていた。そんな中、彼を引き取りに来たのがFHだった。

そこからはFHチルドレンの養成所の様な場所に送られ、力の使い方やこの世界の真実について教えられる。似たような境遇の子どもも何人かおり、初めて友達というものを手に入れた。だが、養成所は中々に劣悪な環境下にあり、訓練についてこれない一部の者は脱走を企てていた。
彼の友達も、その一人だった。彼自身は訓練に十分ついていけていたが、友達との待遇に差が出てしまう事を恐れた彼はその計画に加担した。____結果から言うと、その脱走は失敗に終わる。いとも簡単に警備に取り押さえられ彼等の夢は途絶えた。

その後、彼等は地下の別室に連行された。そこには既に数人のチルドレンがおり、見知った顔も何人か見て取れた。拘束を解かれ、職員が部屋から立ち去ったところでスピーカーからセルリーダーの声が響く。
目の前にいる同胞を喰らえ、最後に立っていた者のみ解放してやろう、と。
セルリーダーはそれだけ言うとぶつりとスピーカーを切り、こちらを観察している様だった。集められた数十人の少年少女がざわめく。だが、次第にそれは悲鳴となり状況を理解した者が友を噛み千切る音に変わっていく。
未だ状況を理解しえない中、鋭く変化した指先が彼の顔をかすめる。それは彼がよく知る、友達の腕だった。何故、と問うにはもう遅い。友達は彼の右眼を抉り出し、苦々しい表情で己の口に放り込んだ。
このままでは殺される。対人戦など経験した事も無かったが、戦わざるを得なかった。
一体どれほどの時間が経っただろうか。気付けば辺りの仲間達は血に濡れ床に伏していた。彼も身体のそこかしこを損傷していたが、意識を保ち、立っていた。
早くこの部屋から抜け出したい。その一心でカメラの向こうに呼びかける。だが、反応は無い。セルリーダーは仲間達を喰らうまで出す気は無いと理解した。